# 高校教育旅行特集　注目の訪問先 台湾

## 台湾で実感する「学び」と「交流」

海外修学旅行の訪問先として、台湾が注目されている。実際に台湾を訪れる高校は近年、増加傾向にある。移動距離の短さや時差の少なさ、治安の良さなどの利便性、安全性はもとより、日本とのかかわりの深い歴史や文化、成長目覚しい経済や産業、美しく多様な自然など、台湾にあふれる魅力は尽きない。海外修学旅行の重要なポイントとなっている学校間交流に関する受け入れ態勢も充実。生徒らが体験、実感できる「学び」と「交流」の旅がある。

### 日本とかかわり深い台湾へ

台湾への高校の修学旅行は増加傾向にある。全国修学旅行研究協会の調査によると、台湾への高校の修学旅行数は09年度が52校、９９４５人（公立36校７３６７人、私立16校２５７８人）。実施校数は5年前の04年度が23校で、年々、増加傾向にある。実施高校を出発地別にみると、東北3校、関東17校、中部10校、近畿17校、中国四国４校、九州1校。国・地域別で全体に占める構成比も公立高校の海外修学旅行に限ると、実施校数で12・1％に上る。

また、文部科学省によると、台湾の高校と姉妹校提携を結んでいる高校は、全国に70校（公立10校、私立60校）に上っている。

台湾を選ぶ理由は何か。地理的な近さ、安定した政治経済、良好な治安、緊急時や急病時に対する態勢などが挙げられる。もちろん移動や時差などの利点もある。定期便の台北までの飛行時間は東京から約3時間30分。日本航空、全日本空輸、チャイナエアライン、エバー航空、キャセイパシフィック航空などが日本国内の主要10都市の空港に就航している。時差もマイナス1時間。距離、時間、予算に制約がある修学旅行には重要な点だ。

台湾の総統府。見学ができ、日本とのかかわりも学べる

### 歴史のうねりに学ぶ

修学旅行先に台湾を選ぶ理由は、旅行実施の利便性や安全性だけではない。「学び」と「交流」による教育効果の高さがある。

テーマの1つが歴史。台湾と日本の間には、歴史の分岐点に深いかかわりがある。台湾の歴史を知ることで、歴史のうねりが、日本を学ぶことにもつながる。例えば、「鄭成功」「日本統治」などのキーワードにその一端が垣間見える。

【鄭成功】台湾史上の英雄の1人、鄭成功は日本にゆかりがある。台湾には古くから先住民が定住し、唐の時代からは漢民族の移動も始まった。16世紀にポルトガル船が台湾本島を発見、17世紀にはスペインを退けた末にオランダが台湾の覇権を握る。そのオランダ支配に立ち上がったのが鄭成功だ。1661年にオランダ軍を駆逐し、新たに王朝を樹立した。

この鄭成功の父親は台湾人だが、母親は日本人だった。7歳までは長崎の平戸で育ったという。鄭成功の英雄譚は日本にも伝わり、近松門左衛門が人形浄瑠璃「国姓爺合戦」の題材とした。

【日本統治】1680年からは清朝の統治が約200年間続く。台湾に漢民族社会が形成され、産業の近代化などが進んだ。19世紀に入ると列強各国が台湾に接近するなど世界情勢が激変。1894年には日清戦争が勃発し、清朝を破った日本による台湾統治が1896年に始まった。

統治時代は、日本が太平洋戦争で敗戦を迎えるまでの約50年間に及んだ。日本統治は植民地支配ではあったが、台湾のインフラ整備などにつながったとの見方もある。統治下で幼少期を過ごした70歳以上の高齢者には流暢な日本語を話し、親日・知日派の人も少なくない。

「光復」（統治解放）後の台湾は、新たな歴史を切り開き、目覚しい経済発展を遂げた。国際情勢の変化を受けながらも、日本とは緊密な国際交流を続けている。

### 産業、文化、自然を感じる

学ぶべきは歴史だけではない。現代の台湾は経済成長を遂げ、アジア・太平洋地域でも躍動感あふれるエリアとなっている。世界をリードする産業分野もあり、日本人に身近な製品の中にも台湾のブランドが多くある。アジアの発展、グローバルな経済を体感できる。

台湾で発展を遂げているのがIT（情報技術）や半導体といった分野だ。かつては農業立国だったが、産業政策を推進め、工業製品輸出国にシフトしている。1980年に「台湾のシリコンバレー」と言われる新竹科学工業園区が台北の近郊に建設されたのを契機に、ハイテク産業が急成長した。コンピューター、半導体、通信機器、精密機器などの分野が伸び、世界有数のIT産業国になっている。パソコンのエイサー（宏碁）やASUS（華碩電脳）などは日本でも有名。半導体メーカーの日台間の提携なども経済ニュースをにぎわしている。

自転車産業も強い。マウンテンバイクなどの製品が、日本をはじめ世界で支持されているジャイアント（捷安特）は台湾のメーカー。台中県に本社を持つ世界最大の自転車メーカーだ。ジャイアントのほかにも、メリダ（美利達）などのメーカーもある。自転車産業の発展を背景として、台湾では自転車レジャーがブームになっている。

### 整備が進む都市や交通網

街並みや交通網にも台湾の活力を感じることができる。伝統的な建造物やレトロな街並みと、現代的な都市や交通機関が織りなす独特の魅力がある。

台北市では、商業施設や高級ホテル、国際会議場などが相次ぎ建設されている。新興地区の信義エリアには、台北市のランドマークとなっている超高層ビル「台北101」がある。高さは508メートル、89階の展望台は観光スポットとなっている。一方で台北市北部の観光地、九份にはかつて鉱山の街として栄えた面影が残る情緒ある街並みが広がっている。

交通網の整備も進んでいる。07年に開通した台湾高速鉄道は、日本の700系新幹線をモデルにした台湾版の新幹線で、台北市と南部最大の都市、高雄の間を最短96分で結んでいる。台北や高雄では、班別行動の移動手段として便利な新交通システム「MRT」（地下と高架を走る電車）が運行されている。

▲台湾版の新幹線「台湾高速鉄道」の車両

▶故宮博物院（台北市）。ルーブル美術館や大英博物館に匹敵すると言われる博物館

### 日本とも縁深い現代カルチャー

先住民を含め古くから受け継がれてきた台湾の伝統的な文化の魅力はもとより、現代カルチャーにも国際性の豊かさを実感できる。台湾の俳優や歌手のアジアを舞台にした活躍は日本でもおなじみだが、日本のアニメや漫画、ポップス、テレビドラマなども、台湾ではリアルタイムで話題になり、関連商品も販売店で日常的に見ることができる。

日本のサブカルチャーに夢中になる若者らが増え、そうした人たちを指すのが「哈日族（ハーリーズー）」という言葉。いわゆる「日本フリーク」といった意味だ。現代文化を通じて若い世代に親日感情が芽生えるきっかけになっている。

### 豊かな自然 美しい景観も

「フォルモサ」（ポルトガル語で「美しい」の意味）。16世紀に台湾を発見したポルトガル船の船員が思わずそうと叫んだと言われる台湾の美しさ。自然、景観からは環境や生態性の貴重さを学べる。

台湾は九州ほどの面積の本島と、金門、馬祖、澎湖など点在する離島を含めて79の島で構成されている。気候は北部の亜熱帯と南部の熱帯に分かれ、チョウや花をはじめ動植物の宝庫。温泉も各地にわき出でており、観光や余暇に利用されている。

## 学校間交流を推進

### 受け入れ態勢充実 希望校は350以上も

台湾での教育旅行の魅力の1つが「交流」。学校間交流の調整、受け入れに関する態勢が充実している。生徒同士も、文化や経済の結び付きが深い日台間だからこそうち解けるきっかけも多いはずだ。

台湾の交通部観光局（日本で言えば、国土交通省観光庁）と教育部（同、文部科学省）は、訪台修学旅行の受け入れに伴う学校間の交流を推進しており、受け入れ組織として「教育旅行策略連盟」を組織している。交流に関心を持つ台湾側の受け入れ校として350校以上をリストアップしている。

学生同士の交流で課題となるのは言語の壁だが、簡単な英語と漢字を使った筆談で解消できそうだ。また、台湾の高校には、日本語学科や第二外国語学習として日本語コースを設定している学校も多い。台湾の学生たちは、アニメやテレビドラマ、音楽などを通じて日本への関心が高く、共通の話題もすぐに見つけられそうだ。

学校や旅行会社による交流の受け入れ校探しには、台北駐日経済文化代表処（台湾の外交窓口）や台湾観光局も協力する。

### 青少年交流が日台間で拡大

#### ワーキング・ホリデー

台湾と日本の間には、09年6月から相互に「ワーキング・ホリデー制度」が導入されている。台湾のワーキング・ホリデー査証は、18～30歳の日本旅券を所持している人が対象。最長1年間の滞在ができ、その間、滞在・旅行費用などを補うために必要な範囲での就労が認められている。

ワーキング・ホリデーの査証申請場所は、台北駐日経済文化代表処（東京）、札幌分処、横浜弁事処、大阪弁事処、福岡弁事処及び那覇弁事処。

## 教育旅行の学習テーマとして注目

### 台湾から日本を見つめる――

## 八田技師の功績学ぶ

八田與一の銅像

台南市官田にある台湾最大のダム、烏山頭ダムは、日本統治時代の1930年に完成した。設計、建設を指揮したのは、日本総督府の技師、石川県出身の八田與一氏（1886～1942）。地元住民に慕われた技師で、今年の命日の5月8日には復元した官舎などが建つ記念公園が完成し盛大な式典が開かれる。

八田氏は現・金沢市に生まれ、土木工学を学んだ後、台湾に赴任。水利事業を担当し、嘉南平野で農業かんがい用ダムの建設を手がけた。総費用は当時の総督府の年間歳入の約半分にあたり、完成まで約10年の歳月がかかった。

ダムは当時、世界3番目、アジア最大級の規模を誇った。完成後のかんがい面積は15万ヘクタールに及び、一帯を豊かな農業地帯に変え、住民の暮らしを向上させた。現在でも稼動している。

八田氏は台湾を去った後、フィリピンに向かう途中に乗船した船が攻撃を受けて死亡するが、その功績は台湾の人々に語り継がれ、台湾の教科書にも紹介されている。放水口に近くには墓や銅像、記念館が建てられている。

烏山頭ダムのある一帯は、シラヤ国家風景区に指定されるなど見所満載のエリア。豊かな自然、サンゴのように美しい湖の景観のほか、泥湯が人気の関子嶺温泉などがある。

シラヤ国家風景区のガイドブック

烏山頭ダムの概要をはじめ、手つかずの自然が残る南部・シラヤ国家風景区の魅力をふんだんに紹介した観光ガイドが完成。入手は台湾観光協会まで

## 埼玉県立志木高校

### 埼玉の公立高で初の海外修旅

## 台湾で"交流"の旅

埼玉県立志木高校（西澤喜義校長）は、09年度から2カ年続けて台湾で修学旅行を実施している。学校間交流をメーンに据え、生徒がコミュニケーションを実感できる修学旅行として成果を上げている。

公立高校の間にも海外修学旅行が広まる中、全国で最も遅く〝解禁〟となった埼玉県。その埼玉で先頭を切ったのが志木高校だった。従来は沖縄県を訪問先としてきたが、情報収集や検討を重ね、県内初の海外修学旅行をスタートさせた。

大学生との交流（昨年11月）

海外修学旅行に関する埼玉県の実施基準（10年度）には期間が4泊5日以内、費用上限が8万1千円という制約がある。近隣の国・地域に絞った結果、治安の良さなどに加え、実施時期の冬季の気候が温暖で、学校間交流の受け入れ態勢が充実した台湾を選んだ。「親日的」とされる人々の雰囲気も選定を後押しした。

10年度の日程は11月16日からの3泊4日。2年生の7クラス約260人が参加した。

### 台湾の学生と「思い伝え合う」

学校間交流の相手は、前年度に引き続き輔仁大学（台北県新荘）の日本語学科の学生。前年度に初めて台湾を訪れる際、高校を探したが、その年度は旅行時期が1月で、2学期制の台湾では高校が学期末にあたってしまった。そのため大学との交流になったが、年上で日本語を学んでいる大学生との交流はスムーズだったという。日本語で自己紹介し、学生生活などを語り合った。

7～8人ずつの班別自由行動にも、日本語を学ぶ台湾の大学生がガイド役として付き添った。高層ビルの台北101や中正紀念堂など台北市内を巡り、庶民的な食事なども体験できたという。

生徒の印象に強く残ったのも台湾の大学生との交流だったようだ。感想文には「大学生たちも日本語が完璧ではないので、お互い必死に思いを伝え合うことはとても楽しかった」と記された。

同校の木田一彦教頭は「歴史や文化を学ぶのと同時に、台湾の学生とのコミュニケーションが生徒にとって大切な体験となったようだ」と語る。

Taiwan
THE HEART OF ASIA

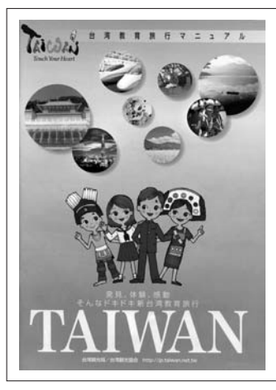
台湾観光局
http://jp.taiwan.net.tw

台湾観光協会

東京事務所
〒105―0003
東京都港区西新橋１丁目５―８川手ビル３Ｆ
電話03・3501・3591　ＦＡＸ03・3501・3586

大阪事務所
〒530―0047
大阪府大阪市北区西天満４―14―３―６Ｆ
電話06・6316・7491　ＦＡＸ06・6316・7398

2010-2011
台日観光交流年
TAIWAN-JAPAN Tourism Exchange Year



台湾教育旅行マニュアルやＤＶＤ、各種観光資料などを配布しているほかに、教育旅行のご相談も受け付けています。

問い合わせは、台湾観光協会まで